



名画の扉

展示担当者である当館学芸員の正田が、淳一氏と生前、「絵画のように木に布をはめ込んで展示したらおもしろいのではないか」と話していたこともあり、木枠に收めるという展示方法となりました。さらに今回は、リコ氏のご了解を得て、幹の部分に布を仕込んで膨らませ、より立体的にしました。「布だからこそできる展示となつております。

(池田)

文化・芸術

新井淳一

(1932~2017年)

原毛色糸ジャカード織物
「櫻(けやき)」
1999年
235枚×186枚

葉の生い茂った櫻の大木が表現されています。こちらの作品は、新井淳一氏の妻であり美術家である新井リコ氏の水彩画を原画として、ジャカード織りで制作されたものです。染めているのではなく、ウールの原毛そのものの色を生かし、色の違うウールの糸を駆使することで櫻の模様を織り出しています。葉の重なりや幹の重厚感、水彩のにじみ具合や濃淡など、細かい質感もしっかりと見て取れます。よくよく近づいてみると、それは織り目の細かさを変えたり、織り方を変えたりすることによって成されている表現であることがわかります。

展示担当者である当館学芸員の正田が、淳一氏と生前、「絵画のように木に布をはめ込んで展示したらおもしろいのではないか」と話していたこともあり、木枠に收めるという展示方法となりました。さらに今回は、リコ氏のご了解を得て、幹の部分に布を仕込んで膨らませ、より立体的にしました。「布だからこそできる展示となつております。

大川美術館企画展から